

平成31年1月21日(月曜日)

## 足立参院議員が 被災現場を調査

### インドネシア地震で

自民党の足立敏之参院議員は、18年9月に発生したインドネシア中部スラウエシ島地震の被災現場を調査(5～6日)し、「液状化による地盤の大規模な流動や、被圧地下水の流出による洪水は世界的にも珍しい。だが日本で起こらない



被災現場を視察する足立氏  
(左から2人目)

とは限らない。備えを学んでおく必要がある」と警鐘を鳴らしている。

|| 2面に詳しく

スラウエシ島で発生した地震はマグニチュード7.5の規模。地震・津波による死者・行方不明者は約3500人に達した。同国政府は国際協力機構(JICA)と復興計画の策定などを進めている。足立氏の調査には、JICAの専門家として同国政府に派遣されている多田直人、早川潤岡氏が同行。5日に地盤の流動化現象で大きな被害を起したパル市ペトボ地区、6日には津波被害が生じたパル湾沿岸部などを視察した。

足立氏は「日本の技術者がリーダーシップを発揮し、被災メカニズムの分析や復旧・復興計画の策定を進めている。日本が頼られている」と話している。

平成31年1月21日(月曜日)

## 足立議員が被災現場調査

18年9月に大規模な地震

と津波に見舞われたインド

ネシア中部のスラウエシ

島。日本国内で多くの自然

災害現場を視察してきた自

民党の足立敏之参院議員は

5、6日の2日間インドネ

シアの被災現場を調査し

た。甚大な被害をもたらし

た液化化による地盤の流動

化現象について、足立氏は

「たくさんのお家が地盤に

飲み込まれていた。非常に

驚いた」と語った。

▶▶1面参照

5日に視察したのは、同

島のバル市ペトボ地区。勾

配が1%程度と平地だった

にもかかわらず、幅1キ、長

さ2・5キの範囲で地盤の

大規模流動が生じた。6日

に訪れたジョノオケ地区で

は幅1・5キ、長さ3・5

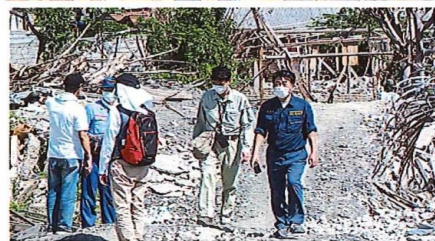
キの範囲で地盤が流動化。

被圧地下水(圧力を受けて

いる地下水)の流出によっ

て洪水も発生した。

## インドネシア・スラウエシ島 流動化した土砂で甚大な被害



足立氏は「大規模な流動

に驚いた。流動化した土砂

に飲み込まれて大きな被害

が生じた」と話した。被害

を拡大させた被圧地下水に

ついては「地震に伴う洪水

で被圧地下水が原因という

のは初めて聞いた」とし、

液状化による大規模流動の被害を受けたペトボ地区④とバラロア地区

日本でも「平野部や扇状地などで高い圧力を受けている地下水があり、日本で起こらないとは限らない」と

し、備えの必要性を説いた。パル湾沿岸部の津波被災地も調査。浸水深(浸水域の地面から水面までの高さ)は約3メートルとみられている。沿岸部の地滑りが津波の発生の要因という指摘があるが、足立氏は「この程度の地滑りの規模で巨大な津波を発生させることができるのか。しっかり検証する必要がある」とした。

地滑りにより津波が起きた事例として、足立氏は「島原大変肥後迷惑」を挙げた。1792年5月に肥前国島原(現在の長崎県)で発生した雲仙岳の火山性地震と眉山の山体崩壊(島原大変)を起因とする津波が、島原や対岸の肥後国(現在の熊本県)を襲った。

後に「肥後迷惑」と呼ばれる災害を事例に、「湾では起こりかねない災害だ。日本でも考えておかなければいけない」と訴えた。液状化による大規模流動の被害を受けたバラロア地区では、地表面の敷力所で断層が現れ、道路はクラック状に変形した。大きいところでは4・5メートルの横ずれを確認したものの、「地震の揺れ自体による建造物の被害が少なかった」という。